

壮大な自然―仏の恵みに感謝するスイスの旅

仏像・仏書贈呈式を終えて

― スイス・ローザンヌ大学 ―

横浜善光寺留学僧
育英会理事 長

黒田 武志

昨年（平成九年）十二月十一日から十六日までの六日間、私は澄み切った空気に包まれた風光明媚な山の国・スイスの旅に出かけてまいりました。

スイスは日本の九州とほぼ同じ国土をもつという小さい国ですが、その標高差は四千四百メートル。国土の六十パーセントがアルプス山系

で、あの『アルプスの少女ハイジ』の心温まるお話もここで生まれました。小さな国ではありませんが、その中に多くの民族、そしてドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語という多くの言語が平和的に共存しています。また、ちよつと鉄道やバスに乗ってトンネルを抜けただけで、ドイツ、フランス、イタリアといった

異国に行けてしまうという不思議さ。国境や言葉や習慣や貧富……すべての垣根を越えて一つの世界平和に向かつて進んでいきたいと願ってきた私にとって、スイスという国はまさに、私の理想をかたちにした国のような気がして、常々とても魅力を感じておりました。

さて、今回のスイス訪問の一番の目的は、スイス・ローザンヌ大学に、日本の仏像と仏書を贈呈するということで、その贈呈式に招かれたものでした。

横浜善光寺留学僧育英会では、仏教を修学する身心堅固で優秀な若者を海外に派遣、または海外より日本に受け入れ、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与しうる人材を育成することを目的として、毎年、すばらしい育英生を誕生させています。その第十二回生に計良龍成けいらりゆうせいさんがいますが、彼は東京大学からスイスのローザンヌ大学に留学し、その熱心さと志しの高さ、そし

て頭脳明晰さによってスイス政府から研究助成金が出てさらに三年間学ぶことができるようになったという優秀な人。この計良さんから、日本の仏像と仏教書をぜひ、我がローザンヌ大学に……と要請があつたのでした。

ローザンヌ大学というところは生徒数約七千人、あらゆる学部の中でもとくに文学部の東洋言語学科は優秀で、りっぱな言語学研究所も設置されていると聞きます。仏さまのみ教えと日本の美しい言葉が遠くスイスの地にも広がり、ヨーロッパの方々に禅の精神が伝わっていくことは私にとってもこの上なく嬉しいことで、さっそく大本山總持寺の江川辰三監院老師とご相談してスイス訪問の準備が始まったのでした。

日本時間の十二月十一日のお昼に成田を発ち、チューリッヒで乗り継ぎ、ジュネーブに着いたのは夜の八時近くになってからでした。ずっとスイス道中の案内役をしてくださった、フ

ランス・ヴァンヌ市にある海印道場の修行僧、
泰天道環（ピエール・クレポン）と計良氏が空
港で私たちを出迎えてくださいました。その夜
はジュネーブから車で四十分ほどのローザンヌ
市内で一泊し、翌十二日の午後、私たちは市の
郊外にあるローザンヌ大学に向かったのでし
た。

ローザンヌ大学仏像・仏書贈呈式

レマン湖畔にあるブドウ畑の斜面をせり上が
るようにして出来た街・ローザンヌは、大学の
他、美術館、博物館も多く、文化學術の伝統の
残る街としても知られています。

スイスにおける最も美しい教会とうたわれる
『ノートルダム大聖堂』は、今から七百年もの
昔に建てられたゴシック様式の巨大建築物で、
旧市街の中心地にそびえたっていました。ステ
ンドグラスも美しく、鮮やかな色調の調和もみ

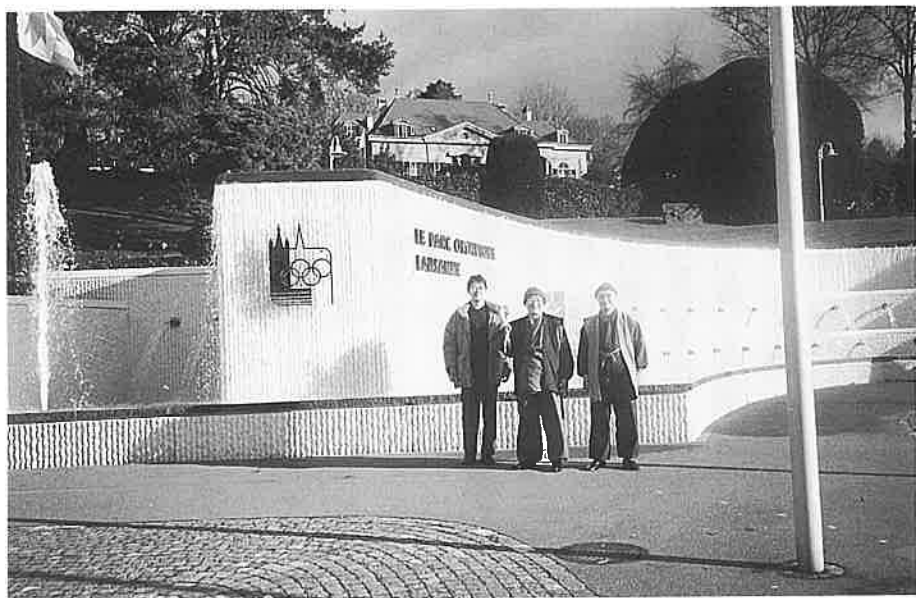
ごとでため息が出そうになり、また、仏に通じ
る靈的な空気に包まれ、宗教宗派は違えど、万
教は一つ、人の心は一つ、きつと釈尊に還って
いくのだなあとしみじみ感じたものでした。

行き交う人々が話すのは、流れるようなフラ
ンス語ですが、異邦人の私たちが入ってきてても、
とても暖かい瞳と態度で迎え入れてくれたこと
が印象的でした。

市の中心地にはこの他、アール・ブリュット
美術館、州立美術館、また一九一七年からロー
ザンヌにはオリンピック委員会（IOC）があ
るところから新しくできたオリンピック博物館
などがあります。計良氏に案内されて歩き、ロ
ーザンヌの街を見て聞いて肌で感じて、興味深
さと親近感と、心地好い緊張感に胸を膨らませ
て、午後、私たちはいよいよローザンヌ大学へ
と向かいました。

ローザンヌ大学はもともとは市内にありまし





オリンピックミュージアム



たが、現在はキャンパスを広大な自然に囲まれた山のふもとに移したそうです。そのキャンパスの広さは、日本の大学のそれとはとても比較になりません。約五万坪もあるうかというほどの牧草地で、羊が穏やかに鳴いている、そんな中に白く輝く校舎が建っているのです。このようなどころで学ぶ学生は、のびのびとおおらかに、好きな勉強に集中できるのであろうと思われました。

ローザンヌ大学仏像・仏書贈呈式は東洋言語学科主任教授トム・ティルマン Tom J.F. Tillemans氏の司会進行、厳肅な雰囲気の中般若心経が流れ、まず仏像の開眼式から始まりました。贈呈した仏書は江川監院老師から、『道元禪師全集』（全七巻）、『本山版 正法眼蔵』『瑩山禅』（全十二巻）など全二十七書。横浜善光寺留学僧育英会理事長として、私黒田武志は、『仏教こゝろわざ辞典』『東洋叢書 チベット』（上・下）、

『仏教思想』など全四十八書の仏書を贈呈させていただきます。後ページ贈呈書籍目録ご参照。

そして、江川監院老師から次のようにご挨拶がありました。

「一言、ご挨拶申し上げます。このたび、イス・ローザンヌ大学東洋言語学科に仏像ならびに仏書を贈呈させていただきます。これらの仏書により、皆様のご研究が、なお一層飛躍なされることをご期待しております。皆様のご関心は、インドとチベットの仏教思想にあると聞いておりますが、この機会に、日本の曹洞禅にもご関心を持っていただき、近い将来、皆様の中から禅の研究者が生まれますことを期待しております。また、禅に関心がない方でも、この機会に、我々とともに、未来に向かって、自分の勤めを果たしつつ、他人の幸せを願い、多くの人々に光明を与えられるように努力なさって

いただけるならば、我々の今回の目的は果たされたものと信じております。皆様のご活躍をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます」

ローザンヌ大学の教授の方から割れるような拍手が上がりました。続いて、ローザンヌ大学側から、図書館長のご挨拶があり、

「このたびは素晴らしい仏像、仏書をまことにありがとうございます。このように尊く貴重なものをいただけるのは、ローザンヌ大学開校以来の快挙です。この上ない喜びでございます。心からお礼を申し上げます」とフランス語で述べられました。

皮膚の色や言葉は違っても、ともに理解しあつて、ともに学びあつて幸福への道を歩んでいきたいと願う心はあつという間に通じ合い、仏像・仏書贈呈式は感動のうちに終了となりました。その感動のままに、私たちは、教授や関係者のみなさんと夕食をともし、すばらしいお

もてなしを受け、さらに友好を深めたのでした。

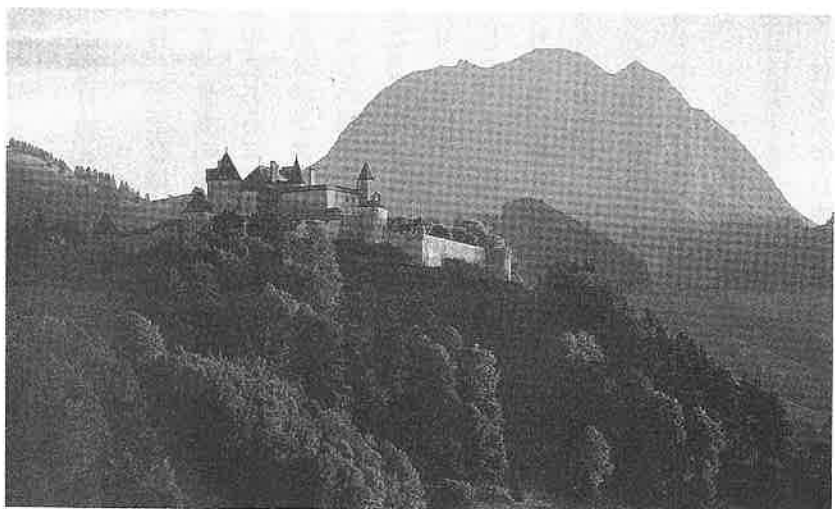
中世の香り残るベルン

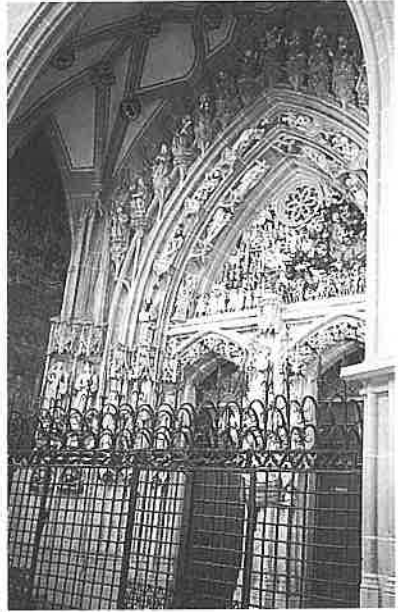
第三日目、十三日は、ローザンヌからワゴン車に乗って、世界の遺産都市ベルンに向かいました。途中にあるグリュイエールというところは、石畳のメインストリートと中世の城からなるかわいらしい村。そこだけ時が止まったかと思ふ錯覚を起こさせるような村を代表する素朴な味わいのグリュイエールチーズは、それはおいしいものでした。十七世紀から伝わる手法でのチーズづくりが受け継がれていると聞き、合理化の嵐に巻き込まれず、昔ながらのよさを伝え続けることの大切さをあらためて感じました。

ほのぼのとした風景を眺めながら車を北へと走らせて、ベルンの街に入りました。スイスのほぼ中央に位置するベルンは、スイス連邦の首都であり、政治の中心地ともなっています。中



グリュイエール





ベルン

心地というところ、都会の喧騒を思い浮かべる方もいるかもしれませんが、ベルンは街の三分の一が公園や緑でおおわれているため、中世のたたずまいが色濃く残り、やはり穏やかな気持ちにさせてくれました。

シュピタル通りというメインストリートを歩いてみると、中世にタイムスリップしたような感覚になりたいへんおもしろい街です。音楽家のギルドにちなんだ「バグパイプ吹き」の噴水など、多くの噴水はすべて十六世紀中期に制作されたものだそうで、日本も戦争がなければ、このように美しい中世の建造物もつとたくさん残されたであろうと思うと残念でなりません。町中に十一もある噴水の石像彫刻からは、当時の人びとの生活や信仰の深さが感じられるものが多くありました。

計良氏の説明によれば、ここはアーレ川の湾曲部に設けられた砦から発展した都市だそうです。

す。ニーデック橋はそのアーレ川を谷ごとひとまたぎする石造のアーチ型の橋。ニーデック橋の近くには、一三四一年来の歴史を持つ教会など、まるで街全体が小さな歴史博物館かと思われるような建造物も多く、感嘆のため息がもれました。

アーレ川を見下ろすように建っている「大寺院」を私たちは参拝することにしました。この大寺院はスイスで一番大きなゴシック建築で、塔の高さは百メートル。スイスの教会の塔の中では一番高いということでした。二百五十四段のらせん階段を登って展望回廊から眺める風景は、魂をゆさぶられるようなみごとなものでした。ステンドグラスから外の光が入れば、幻想的な空間がふわり出され、遠く中世の人びとはここで、神さまと対話をしたのでしょうか。その非日常空間に、日本の寺院との共通点をいくつも発見することができました。清められたよう

な気持ちになるときの人間の心は宗教は違つてもみな同じなのですね。

彫刻の「正義の女神」の表情に、観音さまのお姿を私には観ることができました。

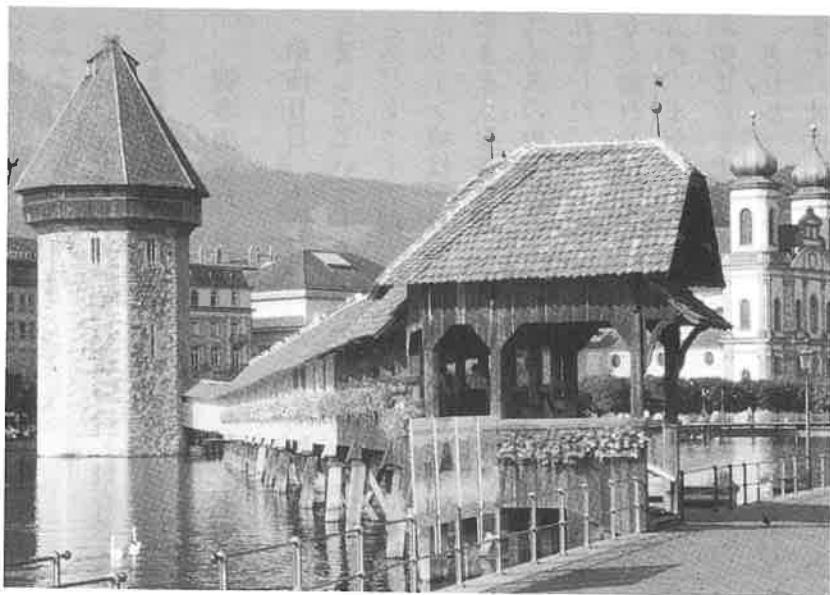
魂浄められる純白の世界・ピラトゥス

第四日目、十四日はベルンから、ブラームスも愛したというトゥーンの町を通つてルツェルンへ。トゥーン湖のアーレ河口付近から見えるトゥーン城は、今にも本物のお姫様が窓からのぞきそうな昔ながらのとんがり屋根のお城で、スイスの少女たちの憧れなのだろうなあと思われました。ブラームス河岸となつている散歩道から離れば、古い町並にはほどよい活気があふれ、また、小高い丘に登ればアルプスの峰々が望まれます。

されルツェルンは、雪と氷の都といわれています。スイスで「四つの森の国の湖」といわれ

るところのほとりにあり、その景観はすばらしいものです。町中は清らかなロイス川が流れ、やはりここも中世の面影を強く残しています。

なぜルツェルンが雪と氷の都かという、市街のすぐ南に、「ピラトゥス」という標高二二二〇メートルの岩山に登る起点となつているからです。スイスという国は長い冬とほんの短い夏が訪れる国。すぐに雪景色を思い浮かべる人も多いことでしょう。ピラトゥスはまさに、スイスそのもの。純白におおわれ、ひんやりと澄み切つた聖なる空氣に満たされた清々しい山でした。ロープウェイと登山鉄道を降り、私たちは、ゆつくりゆつくりと山頂を目指し登つていきました。気温はマイナス十一度。はく息は真っ白。たしかに寒かったのですが、山頂から息をのむようなアルプスの山々のパノラマが目の前にパーツとひらけたときは、寒さなどまったく忘れ、こみあげるような感動で、茫然としておりまし



ルツェルンにて



た。それは言葉ではいい表せないほど、あまりにもみごとな景観でありました。

このピラトウス山は、不思議な伝説と風習が生き続ける聖域だということでした。昔、キリストを処刑したローマ総督ピンティウス・ピラトの亡霊が、各地をさまよったあとこのピラトウス山にたどりついたとされ、スイスの人には「魔の山」と呼ばれ、長く恐れられていたのだとか。今ではそれを信じる人もなく、美しい観光地として有名になってはいますが、僧である私はやはり、そつと手を合わさずにはいられませんでした。この山で、何人かの方は遭難したかもしれません。しかし、今は仏の手の中に包まれて、この清浄な空気の中で私たちを見守っていてくださっていることと思います。

禅の精神を学ぶヨーロッパの人びと

第五日目は、スイス第一の都市・チューリッ

ヒへ向かうことになりました。二千年以上の歴史の厚みを持つ古い都市ですが、一方どんな外からの新しい空気を取り入れ、受け入れる柔軟性を兼ね備えており、スイスを代表する国際都市ともなっています。伝統と、新しい文化が混沌と混じり合う不思議さにとても魅力を感じました。

そんなチューリッヒの市内に、禅道場「無畏城寺」じょうじはあります。住職は蜜仙明峰みつせんめいほう（ミツシエル・ポベ）老師。私と江川監院老師はお招きにより、早朝よりこの道場の禅堂で坐禅の指導をすることになりました。

「このたび、スイスの無畏城寺を訪れることができましたことを心より嬉しく思います。

皆様は、ヨーロッパの禅の先駆者である、弟子丸泰仙老師の法系、またはお弟子の方々と承っております。

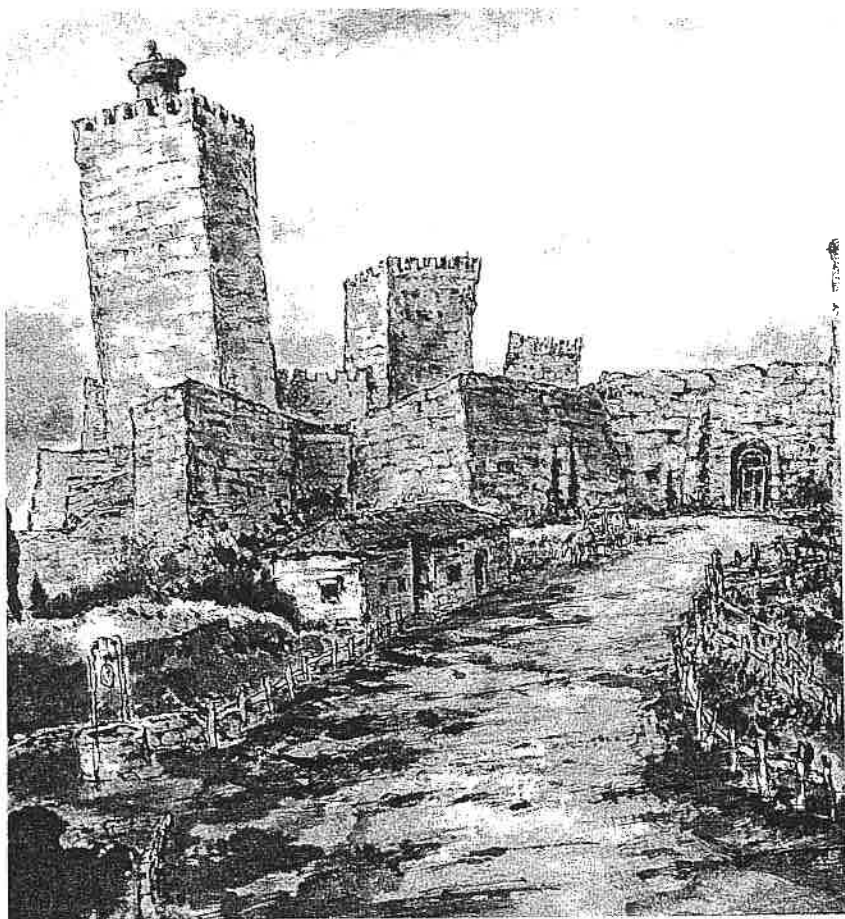
今回、我々はスイスのローザンヌ大学に仏像



▲無畏城寺にて

▼チューリッヒにて





並びに仏書を謹呈する機会を得、スイスを訪問することになりました。ローザンヌ大学関係の方々にはたいへん喜んでいただき、また、暖かいもてなしを受けました。謹呈いたしました仏書は大学の方々だけではなく、皆様にもぜひご利用していただきたく思います。

道元禪師は、次のようにおっしゃっております。

『菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさきに一切衆生をわたさんと発願しいとなむなり、そのかたちいやしといふとも、この心をおこせば、すでに一切衆生の導師なり』

道元禪師がこのようにおっしゃっておりますように、菩提心を起こし、弁道と実践を通して、人びとの導師となり、世界を平和に導けるよう、共に精進していかれることを心から願ひ、挨拶とさせていただきます。『思いいます』

それは心に染み入る、すばらしいご挨拶でした。

私自身もさらに精進して、世界平和のために尽くしていくことが、自分の使命だとあらためて誓わずにはいられませんでした。目の前で坐禅を組む、スイス人をはじめフランス、ドイツ、イタリア、ベルギー…ヨーロッパで生まれ育ちながら、禅に関心を持ち、禅の修行をしようとする人たちの真剣な姿勢を見て、私は感無量になりました。この人びとが今後、さらに学んでいくてくれたらきつと世界は早く心繋ぎ合わせることができるよう。争いも不安もない世界が、二十一世紀には実現することでしょう。

現在、留学僧育英会が派遣し受け入れてきた留学僧は八十四名、派遣国はアメリカ、タイ、インド、スリランカ、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、韓国、カンボジア、ドイツ、スイス、オーストリアなど十三カ国。受入れ国

はアメリカ、スリランカ、韓国、中国、フランス、バングラディシュ、日本、台湾、ポータドなど九カ国にのぼるようになりました。海外で学ぶ一人ひとりが、これからも広い視野を持ち、禅の精神を受け継ぎ、伝えていってくれると私は信じています。今回のようにスイスと日本のすばらしい架け橋となってくれた、第十二回生の計良龍成さんのように…。

蜜仙明峰老師も早朝からのこの訪問をたいへん喜んでくださって、

「真の禅を見せていただきました。このように心が洗われた気持ちになったのは初めてです。私もますます修行を重ね、そしてお弟子のみなさんに真の禅の精神をお伝えしていきたいと思えます」

と手を合わせて語られました。

その夜はスイスでの最後の夜ということもあり、蜜仙住職のメンバーに招かれ、とても楽し

い晩餐会が開かれました。クリスマスも近いということ、壁にはリースが飾られ、テーブルの上には赤いろうそく。そんな中で、観音像の絵や、「佛」という書が飾られてあったり…。日本とスイスの心が融合、調和したお部屋はまさに、境界を越えた新しい空間でありました。青い目と金髪のかわいい子どもたちを抱きよせて、心から、「あなたたちの二十一世紀をよろしくお願ひしますよ」と祈りました。国境を一番感じさせないのは、子どもたちの笑顔です。どの国の子も本当に美しい魂そのままの笑顔を持っています。私は世界のいろんな国を訪問しましたが、世の中にこれほど尊いものはないと感じることがよくあります。この子どもたちの笑顔が消すようなことは、絶対あってはならないのです。

その夜、ホテルに戻り翌十六日の朝、チュールリッヒ空港を発ちました。

飛行機の窓から見える、絵はがきのように美しいスイスアルプスの風景。何世紀も、これほどの美しさを保っているのは、スイスの人びとが、この大自然を仏から、あるいは神から、宇宙から、人間にいただいたすばらしい恵みとして、感謝し、大切にすることを祖先から何代も受け継いできたからなのでしょう。かつては日本人も、自然と共存し、調和してその日必要なものだけを神仏からの恵みとしていただき、感謝してきました。しかし、現代は、不必要に森林を伐採し、排水で川や海を汚し、自然を破壊しつつあります。

今回、私たちが、スイスに届けた仏さまの心。自然を大切に保護するスイスの人は、もしかしたら、現代の日本人よりずっと早く、深く、理解するかもしれません。日本は世界で最大の仏教国のはずなのですが…。

壮大なスイスの大自然は、私にさまざまなか

とを教えてくださいました。日本とはスケールの違う、[〃]生きている自然[〃]を体験し、私はまた心新たに、「人間は、地球的規模でこの自然を護っていかねばならない！」と決意したのでした。

本当にすばらしい旅でした。最後にこの旅の間たいへん親切に案内役をしてくださった泰天道環ことピエール・クレポン氏、そしてお世話になったスイス・チューリッヒ市無畏城寺、蜜仙明峰ことミッシェル・ボベ氏、ポルトガル・リスボン市竜門寺、大雲道光ことラッフル・トゥリエ氏、愛知県曹流寺住職堀部明宏師ほか、いろいろとお心配を下さった数多くの方々の誠に尊い仏縁に心から感謝を申し上げます。

(了)

